（タイトル）

てばなれ

※未上演作品

私道　かぴ

【登場人物】

・施術者…女性の場合が想定されるが、必ずしも女性のみを指定しない
・訪問者…施術者以外に姿は見えないが、確実にそこにいる
・先輩…必ずしも施術者以外の役者が担う、もしくは舞台上に居るとは限らない

【序章】

空間の真ん中にぽつんと　施術台が立っている
やがて施術者がやってくる
ぴんと張った手拭いを広げ、折り、施術台の表面を丹念に拭きあげていく
歳月と経験が感じられる正確な手つき
細部を見詰め、端の端まで済ませると、心なしか施術台が艶を帯びている
バスタオル大のタオルケットを取り出し、両端を持つ
やわらかく空気をふくませるように空中に投げ出し、ふわりと面に着地させる
施術台の上にしわ一つない白い空間がひろがる

身体は動きつづける
アロマを焚く
たっぷりの水といくつかの氷が入った水差しに、香りを含む乾いた葉を浮かべる
照明をすこし落とす
その一連の動作は儀式の様で、次第に空間を掌握していくように見える
すべてを済ませると二本の足ですっくと立ち、ひとつ一つを確認する
次に移ろうとした瞬間、ふと、動作がとまる
その目が、ゆっくりと部屋の上をすべる
身体は次の動作を放棄するように徐々に弛緩し、見ることに集中する
ここにあった時間を確かめるように、施術台を、空間を見詰めている

・・・

香りが辺りに十分に満ちはじめたころ
チリン、と微かなベルの音色が響く
施術者、音の方へ向く
目尻がすうっと引き締まる
手を身体の前でむすび、背骨を正してゆっくりと上半身を倒す
優雅さと威厳がにじむお辞儀

上半身を起こし、現れた表情は微笑みである

施術者　こんにちは、お待ちしておりました

訪問者の姿は施術者以外には見えないが、確実にそこにいる

施術者、訪問者の荷物や上着などを預かり、施術台ちかくのソファに案内する

先ほど香り付けした水をグラスに注ぎ、差し出すようにソファ横のテーブルに置く

施術者　本日は、お越しいただきありがとうございます。この度は急なお知らせになってしまいすみません。…ええ、今月いっぱいで、こちらを辞めることになりまして。たくさんお世話になりまして、ありがとうございました。これまでの施術記録は、後の担当者にきちんと引き継ぎますので、どうか引き続きご利用いただければと思います。さて、今日はいかがいたしましょうか。疲れを感じてらっしゃる部分は…はい、はい。肩ですね。前回も肩にぐっと力が入ってましたものね。それなら、頭からほぐしてあげた方が楽になるかもしれません。腰は…はい、腰もですね。かしこまりました。最近寝付きはいかがですか。…そうですか、眠っている間にも、身体に力が入っているのかもしれませんね。それでは、肩から腰にかけてに重点を置きつつ、全身の流れをよくする施術はいかがでしょうか。はい。そうですね。終了後に、全身が軽くなっていることを目指しましょう。それと…折角最後にこうして来ていただいたので、もしよければハンドもサービスさせてください。…いえいえ、本当に、心ばかりですが、これまでの感謝の気持ちも込めて。それでは、準備を始めますので、少々お待ちください。よければお水をどうぞ。本日のハーブはレモングラスです

施術者、鼓膜をわずかに揺らす程度の音楽をかける

照明を又わずかに落とす

【第一章】

蒸しタオルを取り出し、ひろげる

周囲にしろい蒸気が漂う

施術者、訪問者の近くに寄る

タオルを空気に適度にふれさせてから両手に持ち、差し出す

施術者　それでは、まずハンドから、始めます。…今日は、ふれてほしくない場所はありますか？…はい、わかりました。施術の途中で出てきた際にも、遠慮なくお

っしゃってくださいね

タオルの上に訪問者の片方の手が置かれ、それを施術者が両手でやわらかく包み込む
手のひらに蒸気を含ませるように、優しくもみ込んでいく

施術者　熱くないですか？

施術者の目がぱっと訪問者の顔の方へ向けられる
返事を待って、微笑みを返す

施術者　…はい、ありがとうございます

施術者の目線はふたたび手に戻される
しばらくの間、ふたつの手とそれにもまれる手の運動だけが続く

施術者　反対の手も、よろしいですか

もう一方の手を取り、同じようにやわらかく包み込む

施術者　強さは大丈夫ですか？……はい、ありがとうございます

施術者の目線がふたたび手に戻ろうとした時、ぱっと訪問者の方を見る

施術者　…あ、いえいえ。病気とかそういうことではないんです

施術者、微笑んでふたたび手元に視線を落とす

施術者　辞める理由…そうですよね、それが必要ですよね。何か…転職とか、キャリアアップとか、世間一般に言われている、そういうことが。…でも、すみません、正直なところ、この先のことは何も決まってなくて

施術者、訪問者の手を丁寧に机に乗せる
熱のひいたタオルを小さくたたみ、脇に置く

施術者　オイルを塗っても大丈夫ですか？…はい、それでは、ラベンダーの香りのオイルを使いますね

施術者、オイルを数滴手のひらに取り、両手に軽く広げながら体温で温める
訪問者の片手を取り、オイルを全体になじませていく
先程よりもねっとりとした、うねりのある動き

施術者　何と言ったらいいんですかね。まだ言葉が見つかっていないのですが…でも、こうして人をさわらせてもらうお仕事をしてきて、「ああ、もういいんだ」って。いいんだって、思うことがきっと、あったんですね

施術者、訪問者の手のひらを上に向ける
両方の親指で円を描いたり、手首に向けて絞り出すように押したりする

施術者　セラピストとしては、１２年になります。始めた頃は、まさかこんなに続くとは思ってなかったんですが、意外と自分にあっていたのかもしれません…手、段々と温まってきましたね

施術者、動きを何度か繰り返す
ふいに口元から笑いを含んだ空気が漏れる

施術者　ふふ、いえ、あまりこうして、施術中に私自身のことを喋ることは多くないものですから、不思議な感じがして。聞くことが圧倒的に多い場所なので。お仕事の話とか、ご家族のこと、将来への不安とか、昔の話とか。そういうことですね

施術者、指を一本を取り、付け根のほうからつまむように圧迫しつつ指先へ動かす
５本の指をそれぞれ同じようにしていく

施術者　次は手のひらを広げますね

訪問者の指と指の間に、両方の手の指を差し込む
ゆっくりと手のひらの筋肉を伸ばしていく

施術者　昔の話は…どんな子どもだったとか、習い事は何をしていたかとかそういう話です。昔から性格とか身体の使い方は変わらないんだなあって、そんなことを思って聞いていますね。…痛くないですか？…よかったです

徐々に手のひらを開く
しわ一本一本の隙間にあたらしい空気がふれ、表面は艶やかに光る

施術者　私…私は、子どもの頃、何でもさわる子どもだったと、よく親から聞かされました。そう思うと、昔からずっと変わってないのかもしれません。布も、おもちゃも、イスも、人も、さわってわかる。そうやって世界を認識していたのかもしれないなあって

訪問者の手のひらを下に向ける
指を一本ずつ持って回したり、引っ張ったりを繰り返す

施術者　…はい。それでは、反対の手に移りますね

施術者、オイルを適量垂らし手のひらで温めてから、訪問者の反対の手を取る
両手のひらでやわらかく包み、なめらかに動かす
周囲にオイルの香りが立ちのぼっていく

施術者　もちろん、その頃はセラピストなんて全然知らなかったですし、実際に目指したのも、一般的に考えるとずっと遅かったんですけどね。…力加減、大丈夫ですか。…はい、ありがとうございます

施術者、訪問者の手のひらを上に向ける
両方の親指で円を描いたり、手首に向けて絞り出すように押したりする
その動きは先ほどよりもなめらかに見える

施術者　あの、こんな話でいいんでしょうか。…ああ…どういう人がいま自分の身体をさわっているのか、そういう点では、確かにお話をすることも必要なのかもしれません。なぜ私はもみほぐしをしていて、なぜ辞めようとしているのかってことですよね

施術者、指一本を取り、付け根のほうからつまむように圧迫しつつ指先へ動かす
5本の指をそれぞれ同じようにしていく

施術者　物心ついた頃から、気づけば家族や親戚のマッサージをしてました。マッサージと言っても、背中の上に乗って踏んでくれとか、こぶしで肩をトントン叩いてくれとか、簡単なものですけど、すごく喜ばれました。「気持ちいいなあ」

とか「うまいじゃないか」と言われると悪い気はしなくて、今思えば乗せられていたんだと思うんですけどね。まあ、自分がこの歳になると、誰かにさわってもらうのは、それだけで気持ちがいいってわかりますし

薬指を持って、何かに気づいたように止まる

施術者　こちらの手の方がつめたいですね。ちょっと重点的にもみますね

そこから、各指を先ほどの手よりも多めにさするように動く

施術者　それでも、何か素質の様なものがあったとしたら、それは「よく気づく子だった」ということでしょうか。祖父と、父親の背中は全然違うんです。乗ると本当によくわかる。祖父は、しっかりと身体が守られている硬さで、しばらく踏むとすぐ緩む。一方の父親は硬くて硬くて、踏んでもなかなか柔らかくならない。何かから頑なに自分を守ろうとしているみたいな身体でした。実家は、長野県の田舎の大きな田んぼと畑を持つ家でした。そこを毎年耕している祖父と、しがないサラリーマンをやっている父親。身体って全然違うんだなあって思って、踏み方のリズムを換えて、特に硬いところは体重をよりじっくりかけるとか、自分なりに工夫してやりました。そういう勘はあったように思います。…次、手のひらいきますね

訪問者の指と指の間に、両方の手の指を差し込む
ゆっくりと手を開き、手のひらの筋肉を伸ばしていく

施術者　痛くないですか？…ええ、こっちの手の方がちょっと硬いですね。よくさすっておいたので、少し楽になるといいんですが。私、一般的な人よりも手が小さくて、セラピストとしては不利なんです。だから、さする、ひねるの動きを多く入れて、少しでも補填できるようにしています

訪問者の手のひらに赤みがさしている
その様子をじっと見ながら話を続ける

施術者　自分の手が人より小さいことを知ったのは、高校生の時でした。私、バレーボール部に入っていたんですけど、いつの頃からか、どうしてだったのか記憶が定かじゃないんですけど、気づくと私が顧問へのマッサージをするっていう習慣が出来てたんです。その時に、「お前手が小さいなあ」って言われて、ああ

そうなんだって気づいたっていう。不思議なのが、マッサージをすること自体への抵抗はなかったというか、ちょっとぼーっとしたところがあったんですよね。でもほら、同級生とか先輩とか、そういうの見逃さないじゃないですか。誰も話してくれなくなったり、陰で悪口を言われたりとか、あーなんかいやだな、辞めたいなと思ってたら、ある日突然解雇されたんです。マッサージ係を。びっくりしました。顧問から、「お前もうやんなくていいよ」って言われて。なんでだろうって思ったけど、きっとその、肩をもむ態度に出てたんですよね。やりたくないっていう気持ちが。身体って、やっぱり敏感で、正直なんだなと思いました

訪問者の手のひらを下に向ける
指を一本ずつ持って回したり、引っ張ったりを繰り返す

施術者　よかったと思ったのもつかの間、次の年、三年生の最後の試合で、突然レギュラーから外されました。なんでって思ってたら、同級生から「あの時、マッサージ続けなかったからだよ」って言われたんです。…私、その頃の記憶が、あまりなくて。じゃあどうしたらよかったんだろうっていう気持ちだけが、強く残ってます。当時は、なぜだかよく目をつむってました

施術者、しずかに目をつむったのち、動作を続ける

施術者　以前、目の調子が悪い方に施術した時に、セラピストさんも目をつむってやってみてくださいって言われて、その通りにしてみたことがあったんです。そうしたら、何だか、いつもよりずっと深いところまで意識が潜っていく感覚がありました。その人の深部に入っていくみたいな…。ああ、だから施術を受ける人は、大体の場合目をつむるのかなあと思いました。施術される方も、その方がより深く感覚を味わえるのかもしれないなあって。…もしよかったら、目をつむって、受けてみてくださいね

施術者の動きが徐々に深さを増していく
呼吸も深さを増す
動きに長いリズムが出来てきた時、ふと、手が止まる

施術者　…あ、私いま、指が六本ありました

施術者、微笑みながら訪問者の両手を丁寧に置き、手の施術を終える

【第二章】

施術者、訪問者を施術台へ促す
手拭いを取り出し、細く折ったのち顔を置く部分に円形に設置する

施術者　それでは、次に移ります。ゆっくりでいいので、こちらへうつぶせになってください。この円形のところに、顔を出してもらえればと思います。顔の下のところに腕を置く台があるので、よければそこに手を乗せてくださいね。ここからは、肩、腰、足と順番にさわっていきますね

施術者、台の上にある一体の身体を見詰める
目でそのおおよその範囲を測っている
その身体の上に、タオルをふわりとかける

施術者　苦しくないですか？…はい、それでは、肩をさわっていきますね

施術者、訪問者の背中の中央に片手をそっと置く
その手を身体から離さないまま、訪問者の頭の上にまわる
ふたつの肩甲骨の上に、それぞれ手を置く
両手であたためるように、身体にふれたまま段々と首の方へ進む
端までくると、親指を首の脇へ、それ以外の４本の指を背中へ置く
親指で身体の状態を確かめるように力を加えていく

施術者　肩、矢張り結構張ってますね。…ここのあたりとか、びっくりするくらい硬くなってます。少しずつほぐすので、痛かったら言ってください

施術者、無言で横たわった身体と対話を続ける
ふと、その目が訪問者の目線を捉え、声に耳を傾ける

施術者　それから、ですか。ああ、すみません…たしかに、さっきの話で終わると、なんでセラピストを選んだのか、わからないですよね

親指で押す動作が肩の端まで到達すると、肩の曲線に沿ってさする

施術者　大学に進学する時に、もうスポーツはいいやと思って、美術大学の彫刻科に進

んだんです。先の話のとおり、ふれるのが好きな子どもで、ものの質感や形に興味があったので、ぴったりだと思って。ただ、これだと思って猛勉強して入ったものの、いざ始まってみると、入選することを目指して作品をつくる風土に馴染むことが出来なくて。そんな時、友人から勧められたのがデッサンモデルでした

反対の肩へ移る

移る際も、手は常に身体のどこかにふれた状態である

施術者　では、反対側も施術していきますね。…あ、ここすごく硬いです。こちらの方が張ってますね。カバン、どっちでお持ちですか。ああ、やっぱり、こっちを支えるために、ぐっと力が入るから痛くなってるんだと思います。念入りに伸ばすようにしますね

親指で、首の方から肩の端にかけて順に押し進める

施術者　デッサンモデルは…最初は全然気が乗らなかったんですけど、時間はあったし、他のバイトよりも給料がよかったので、やってみようと思って。そしたらこれが、本当に楽しかったんです。天職だと思いました

親指が少しずつ深いところまで入っていく

施術者　デッサンモデルって言うとよく、裸でポーズを取っている姿を思い浮かべて、恥ずかしくないのとか、よくあんな仕事しているねとか、色々な言葉をかけられるんですが、でも結局あれは、絵のために、いかに良い形でいられるかってことなんです

身体のどこかにふれたまま、腰の方へと移動する

両手を首の下にそろえて置き、円を描くように背中から腰にかけてさする

施術者　始めて間もない頃は矢張り恥があって、全然いいポーズではなくて、そういう時は完成した絵もぱっとしないんです。そこから徐々にいい形とは何だろうって考え始めて、首の筋を綺麗に出すにはどうすればいいのかとか、腰からお尻、太ももにかけての曲線をどう見せるかなど色々に作戦を練るようになりました

腰の部分に手のひらを添わせ、臀部に向かってゆっくりと降りていく

降りながら、丹念に反時計回りに円を描く

施術者　すると、終わった後に目に入ってくる絵たちが、すごく良くなってきたんです。私が見せたいと思って出した身体の曲線を、うまく拾っている絵や、神経を研ぎ澄ませた指先などをしっかりと描き留めた一枚を見ると、努力が伝わったようで嬉しくて。不思議なもので、同じ空間の中で長い時間一緒に過ごしていても、絵を描く人たちとモデルは喋りません。でも、その出来栄えで毎回言葉を交わしているような気持ちでした。担当の方も「あなたは評判がいい」と言ってくれて、次の回も、その次の回もって仕事がつながって、やっと居場所が見つかったような気持ちでした

立っている方と反対側の臀部側面に手を伸ばし、優しく捏ねるようにもむ

施術者　あれっと思ったのは、それから2年ほど経った頃でした。おそらく秋頃だったと思うんですけど、ポーズを取って少し経ってから、あ、寒いなって思ったんです。見ると部屋の窓が開いていて、きっと誰かが換気で開けたままにしていたんでしょうね。誰も気に留めていないみたいでしたけど、こちらは服を着ていないので寒くて。このままではポーズの維持も難しいので、言ったんです。「あの、窓を閉めてもらえませんか」って

施術者、腰の中心に両親指を置き、腕だけでなく腰から徐々に力を加えていく

段々とその体勢が前傾になっていく

施術者　部屋の空気が、一瞬にして変わりました。こちらを見る、目。目。目。そのどれもが、驚いていました

指が沈むところまで沈むと、再びゆっくりと指を離していく

ほんの少しずらした位置に、また静かに親指を沈める

身体の中に杭を打っていくような動作

浮かんでは沈み、浮かんでは沈みを繰り返す

施術者　こいつ、喋るんだ。意見を、主張するんだ。信じられないかもしれませんが、その人たちは、私のことを、本気でただのポーズを取る人形としか考えていなかったんだと思います。その証拠に、誰も動きませんでした。仕方ないので、すみませんと言って、すたすたと歩いて、自分で窓を閉めました。その時のポーズは、永遠に失われてしまいました

手は太ももの付け根に移動する
太ももをつまむようにしては離し、つまんでは離しながらふくらはぎまで移動する

施術者　あの時の、人々のぎょっとした目。心の底にざらついた気持ちが残りつつ、それでもどこか申し訳ない気持ちもあって、それからはもっとポーズを工夫するようになりました。もう一度、関係性を結び直せないかと思ったんです

右手と左手を上下にしてふくらはぎを持つ
軽く押すようにして足首から膝裏までをさする

施術者　そして、とうとう決定的なことが起こりました。その日私は、首をひねって斜め下を見るポーズを取ったんです。どうしてそんなことをしたのか、今でも愚かだったと思います。人間が首をひねった状態で一定時間いるとどうなるか。気道がふさがって、息ができなくなるんです

手、足首のところで止まる
一呼吸置いたのち、両手を離す
反対の足を持ち、ゆっくりとさする動きを繰り返す

施術者　そのうちあたりが真っ白になって、バタンと倒れました。どうしよう、ポーズを再開しなくちゃと思っても身体が全く動かず、立ち上がることもできず、すーっと意識が遠のいて…後のことは、よく覚えていません。それでも気を失う前に、ひとつだけ、耳に届いたものがあって

片手を膝の裏に置き、片手で足首を持ってふくらはぎを持ち上げる

施術者　…誰かがついた、大きな、深ーいため息でした

かかとをお尻の方にぐーっと優しく引き寄せる
十分に伸びたら反対も同じようにする

施術者　病院で目が覚めてしばらくして、自分の身に起こったことを理解した時、ああ、私はやっぱり人間扱いされてなかったんだなって思いました。ポーズを取る人形は、黙って、しずかに、画家の描写の邪魔をせずに立っているだけでいい。そこに、向上心とか、出来上がった絵に対する気持ちなんかは、いらなかった

んだなって

施術者、足を静かに施術台へと戻す

施術者　…はい、ありがとうございました。足はこれにて終了です。肩から腰もですけど、下半身も結構力が入っている感じでしたね。日常でも時々、ここの筋を伸ばすようにしてあげると、張っている部分が少し楽になると思います。それじゃ、次はあおむけになってもらって、頭から胸にかけて、やっていきますね

【第三章】

施術者、身体の上のタオルをすっと取る
訪問者の顔の下に敷いていた手拭いをさっと折り畳み、片づける
訪問者の身体が施術台の上に横になるのを目で追う

施術者　…はい、ありがとうございます

あおむけになった身体の上に、タオルをそっとかける

施術者　なんだかすみません、暗い話ばかりで。話してみて気づきましたが、この流れでは、全然セラピストに行きつかないですね。むしろ、いろんな人の夢を壊してしまっているような…いえ、私としては、越えてきたことなので深刻さはないのですが。…あの、よければ、蒸しタオルで目を温めていいでしょうか。…はい。それでは、少しお待ちくださいね

蒸しタオルを取り出し、両手に広げて熱を冷ます
周辺に蒸気が広がっていく
適度に冷まし、訪問者の目の上にそっと置く

施術者　熱さは、大丈夫ですか。ええ。これでしばらく置きますね。前に、夕方ごろに片頭痛がするとおっしゃっていたので、眼精疲労からくるものなのではと思いまして。こうして温めると痛みも和らぎますので、つらい時にはご自身でもやってみてくださいね

施術者、訪問者の頭上の位置に移動する
移る際も、手は常に身体のどこかにふれた状態である

施術者　それでは、頭からさわっていきますね

両手の親指を額の中央に置く

親指でやわらかく小刻みに力を加えながら。こめかみの方へ押していく

髪の生え際まで来たら額の中央に戻る

眉毛の上の面積をすべてカバーできるよう、位置をずらしながら動作を続ける

施術者　痛くないですか。…よかったです。…はい、その後…デッサンモデルを辞めてからは…就職活動があって、その時に改めて、一体自分には何が向いているのかを考えました。やっぱりポーズや身体のことを考えるのは好きだったので、それじゃあ、積極的に意志を持って取り組めるモデルをしたらいいんじゃないかと。探してみると、着物の貸出業務をやっている会社があって、そこのイメージモデルの募集が出ていたので、応募して働き始めました

両手の指先を左右のこめかみにあて、１０秒ほど力を入れ、同じくらいかけて緩める

数回繰り返したあと、ゆっくりと円を描くように動かす

施術者　仕事は、すごく楽しかったですね。着物のこの部分の柄を見せたいから少し腰をひねって写るとか、帯の鮮やかさを出すために、あえて色を抑えた環境で撮影するとか。意見を言っても迷惑がられるどころか、歓迎されて。最初はちょっと驚きました。給料はデッサンモデルの繁忙期と比べるとずいぶん落ちましたが、それでも嬉しかった。最初に給料をもらった時、「ああ、自分は服を来てお金もらえるようになったんだな」って思ったのをすごく覚えています

両手を後頭部にまわし、指先を、時間をかけて後頭部の頭蓋底の骨の内側に押し込む

施術者　着物をデザインされた方が撮影現場に来て、私の撮影風景を見て、「あなたが着ているとこの着物がすごく引き立つ」を言ってもらったこともあって。あれは嬉しかったですね

片手を頭蓋骨の下に入れ、もう片方の手で肩を軽く持つ

頭蓋骨を支えている方の手で、頭を肩の方へ慎重に倒していく

施術者　ふーっと…息してくださいね。いいですね、力が抜けてきました

反対も同様に行う

施術者　そういう業務だけならいつまでもできたんですが、まあそういうわけにもいかないのが世の常で。たまに、取り扱っている着物の会社の方が来て、食事会、という名の接待が行われることがありました

両手で水をすくうような形状をつくり、頭を徐々に前の方へ持ち上げる

施術者　ふーっと息を吐いてください…その調子です。もう一回いきますね。ふー…

首をそっと元の位置に戻す

施術者　大体はね、よい方ばかりなので、楽しく食べたり飲んだりすることが多いんです。うちの会社は、私のほかにも4名ほどモデルがいたので、特に皆で出席する席は明るい雰囲気でよかったですよ。ただ、中にはそういうわけにいかない得意先もいて、特に老舗の会社の方は、関係性もあって上司もなかなかコントロールできない部分がありました。…肩から胸にかけて、さわっていきますね

肩の上に親指、肩の下に残り4本の指を差し入れ、徐々に圧迫していく

施術者　ある夜の飲み会でした。その席は、明らかにいつもよりお酒を飲む速度が速かったんです。相手の社長や社員たちが、こちらにお酒をすすめて、その誘いに乗るかどうかで何かを試しているような、そんな気配がありました

両肩に手を添わせ、段々と力を加えていく

肩が十分に開いたら、手のひらの根元を鎖骨の上にあて、ゆっくりと押す

施術者　お酒の量が増すにつれて、場に響く声はどんどん大きくなっていきました。嫌な予感が空間に満ち満ちていて、それでもなんとか回避しようと皆必死でした。どんどん注ぎ足されるお酒に、酔わないでいるのに精一杯で、まわりの同僚も同じだったと思います。そんな中、向こうの社員が、一人のモデルを褒め始めました。その子の立ち姿や、顔立ち、容姿のひとつ一つを逐一挙げて、すばらしい、すばらしいと連呼する

鎖骨の上に置いた手のひらで、ゆっくりと円を描く

施術者　ああ、これはよくないことになる、と思いました。その人は気を使ったのか、モデルを一人ひとり順に指名して、褒めちぎっていく。笑う顔が徐々に引きつる中、その人は私を指して言いました。「カメラの前で笑っているだけで金が稼げるなんてすばらしいよ」。お酒がまわった頭にその言葉がぐるぐる回って、でも大丈夫、まだ大丈夫と思っていました。それなのに、同意を求められた同僚のカメラマンが、言ったのです。「容姿だけで勝負できる人は、いいですよねえ」

指先をそっと胸の上に置き、時間をかけて体重を乗せる
また同じだけ時間をかけて力を抜いていく
胸元のいくつかの箇所に繰り返す
その様子は人工呼吸を行っているようにも見える

施術者　これまでそのカメラマンと、同僚のモデルたちと、時間をかけて行った撮影風景が蘇って来ました。着物に合ったポージングのために練習を欠かさなかったこと、着物の柄の歴史を調べ、撮影環境に取り入れたこと。…そのすべてを共に行い、一緒に広報写真をつくってきたはずのカメラマンの口から、あんな言葉が出るなんて。たとえ酔っていたとしても、あれだけは…

目をつむり、所作を止める
胸の中心にそっと片方の手のひらを置く
あたたかさを確認しているかのような動作

施術者　その時、「なあ」という言葉とともに、相手の会社の社長の手が私の肩に乗りました。その瞬間、あ、もう限界だと思って、席を立ちました。後ろから何か言われていたけど、世界がぐわんぐわんと揺れていたけど、とにかくそこから逃げました。…翌朝、もしかしたら、もしかしたらそのカメラマンから謝罪があるかもしれない。そう思って、重い身体を引きずって会社に行きました。すると、モデル全員が集められ、話があると言われました。一人は泣きはらした目をしていて、なんだか悪い予感があったし、聞かなくても、どこかでわかっていたと思います。話によると、昨夜の帰り、モデルの一人が先の社長に無理やり宿に連れ込まれそうになったという。泣きながら上司に電話をかけ、双方で話し合いが持たれ、解決したとのことでした

手が完全に止まる

施術者　それから全員に、綺麗にラッピングされた小包が配られました。その社長が、反省の証に買ってきたんだそうです。本当に済まなかった、これからも何卒宜しくお願いしますとのことで、皆も思う所はあるだろうが、大人の対応でお願いしたい。そう上司が言いました

自分の手のひらを目の前に持ってきて、じっと見詰める

施術者　このままではどうにかなってしまう。怒りを言葉で表明してしまわないうちに、急いでトイレに駆け込みました。ふざけるな、という感情が胸の中で渦巻いて爆発しそうでした。しばらくして何とか落ち着き、給湯室に向かうと、そこには被害にあったその人がいて、片手にチョコレートを持って立っていました。それをこちらに振ってから、一口かじって言いました。「もらった小包、駅前に新しくできた、有名パティシエの新作チョコだって。並ばなくちゃ買えないやつ」。すーっと血の気が引いていくのがわかりました。その口が、何の悪気もなく、おいしいよ、と動いたのを見て、我慢できずにそこを飛び出しました。なんで、どうして、ふざけるなよ、なんで受け入れちゃうんだよ、そのまま走って走って、二度と会社には戻りませんでした。小包は、どこかの駅のゴミ箱に捨てました

いつの間にか、固く拳が握られている

施術者　そうそう、会社から出る時に、あのカメラマンとすれ違って。けれど向こうの表情は何一つ変わらなかった。万が一にでも、期待した私が馬鹿でした

【第四章】

施術者、あおむけで施術台に横になっている

施術者　そこから、まったく動けなくなりました。どれだけの時間が経ったのか。ずっと同じ天井を見上げ続け、みるみる体重は減り、仕方がないので這うように部屋を移動して、食べ物を何とか口に入れて命を繋ぎました。考えていたのはずっと同じこと、今までの自分はなんだったんだ、どうしてこうなるんだということばかり

手を高く上げる

何かを掴もうともがく動作

する、すると空気が指と指の間をすり抜けていく
徐々にその動きは激しくなり、息が上がり、施術台ががたがたと揺れる

施術者　どうしてみんな、当たり前みたいに気持ちよくなっていくんだろう。それは、勝手にそうなってるんじゃない。決してない。私が、そうなるようにしてるんだよ。気持よくなるように、美しく見えるように、少しでもよくなるように、考えて、そうしてるんだよ。ぜんぶ、私が、意志を持って、やったことなんだって

自分の手に目をやる
指の一本一本を確かめるように動かす
ばらばらに動いていた指はやがてひとつの規則性を帯びてくる
手のひらで誰かの肩を包み込み、親指でぐっと押す動作

施術者　…やっぱり、どこまでも身体が付きまとってくるなあ…

上半身を起こす

施術者　その時耳に再生されたのは、いつか聞いた「ありがとー」と言う声でした。祖父の声で、祖母の声で、父の声で母の声で、そして、いつかの顧問の声で。「気持ちいいなあ」「すごいすごい」「うまいじゃないか」「お前のもみ方は素晴らしいな」「いつか、一流のマッサージ屋さんになれるよ」…

ぎゅっと手を握る

施術者　世間の方は、気持ちよくされることを当たり前だと思ってるのかもしれない。そして、どうやら私には、不思議とその役割が回ってくることになっているらしい。どうして、と思う。理不尽だと思う。でも、そういうことになっているのなら、じゃあもうむしろいっそ、気持ちよくすることを専門としたらどうだろうか。そちらを選んだら、私の人生はどうなるのだろうか

施術台を下りて、二本の足で立つ

施術者　そうして私は、セラピストになることにしたんです

真新しい手拭いを広げ、文字を読む動作

施術者　セラピストとしての研修は、身構えていたよりもずっとわかりやすく、すっと頭に入ってきました。小さい頃からマッサージをしていて、相手の反応に合わせてやっていた感覚的な部分が、次々と言語化されていくようで心地いい。時には、勉強しているだけで、こちらがケアされているような錯覚に陥ることもありました。例えば、テキストの冒頭に書かれていた文章。「マッサージなど相手の身体にふれて癒す行為を担う人は、他者の話に耳を傾けて安心させることに優れており、思いやりのある人です」。この一文を目にした時、涙がこぼれそうになりました。幼い日の自分を思い切り抱きしめてやりたいような気持ちになりました

手拭いで施術台を丹念に拭き上げていく

施術者　施術をするために身体のことを一から知っていく過程にも、大切なものを一つずつ拾い集めていくような感覚がありました。まずは、頭

頭をもみほぐす動作をしながら話す

施術者　頭蓋骨で守られた内側には、大切な働きを担う脳がある。日々思考し続けており、現代社会では負担の大きい部分であるので、両手で優しく包むこむようにもみほぐす。…次に、首から肩

首に手を当てもみほぐす動作をしながら話す

言葉と共に、動きは徐々に肩にも移行していく

施術者　首から肩にかけては、頭とのつなぎ役かつ、日々膨大な活動をこなす結合部分である。感情を抑える際には筋肉がぎゅっと縮まる箇所でもあり、念入りに時間をかけてほぐす必要がある。…次に、胸

胸に手のひらを添わせほぐす動作をしながら話す

施術者　胸は呼吸をつかさどる部分であり、緊張状態もわかるため施術中は常に観察を怠らない。呼吸のリズムを手で敏感に感じ取りながら施術を行う…次に、腹

腹に手をあて円形にさする動作をしながら話す

施術者　腹は骨に囲まれておらず無防備であり、より敏感な箇所である。脂肪がつきやすく冷えやすい個所でもあるため、注意を払う…次に、腰

腰に手をあて脇に向かって伸ばす動作をしながら話す

施術者　身体の中でも強度を持つ部分でありながら、運動不足やストレスなどによって異変が起こりやすい。両手で筋肉を柔軟に伸ばすようにしてほぐす…次に、足

足の裏を両手で支え、ぐーっと関節に沿って曲げる動作をしながら話す

施術者　足は大地と接続される部分であり、身体を支え、運ぶ原始的な役割を担う。特に足首から先は複雑な骨の構造を持っている。身体の端であるため、血液循環の改善を促すために念入りにほぐす…次に、手

親指で手のひらを押す動作をしながら話す

施術者　手は、ふれた際に最も感情が伝わりやすい器官である。愛情を持ってさわることも、憎しみを持ってつねることもできる。日々忙しく働いている部分であり、指や手のひらなど部位が多いので細かく丁寧にもむ必要がある

動作から徐々に解き放たれ、自分の手先をじっと見る

施術者　…この、「手はふれた際に最も感情が伝わりやすい器官」という記述に、最初は恐怖を感じました。手は、怖い。好意も伝わりやすければ、苦手だという気持ちもダイレクトにわかってしまう。それは、セラピストを目指す仲間同士で練習のために施術し合った際に、いやと言うほどわかりました。ほぐす対象のことを快く思っていない施術者の手は、驚くほど硬くて一向にほぐれない。反対に、ほぐすことに長けている人の手というものは、水のようにやわらかく、するりと身体に浸透していく。…私は、そのことをある先輩の施術を受けて初めて知りました

施術を受ける体勢をとる

施術者　あの時の、先輩にしてもらった施術のすごさを、なんと表現していいかわかりません。言うなれば、来てほしい所に指が来る、吸い付くように内側に入っていく。しかし全く後に残らない。どこまでもやわらかいのに、気づくとしっか

りとほぐされているという、まさにこういう施術をしたいと思うお手本そのものでした。驚いたのは、帰り道、身体がぽかぽかしていたことで、それは翌朝の起床時にもまだ感じられるほどでした。さわってもらった感触が、身体の中にきちんと残っている。それは何か、押すとかもむという動作以外の、気持ちのようなものを一緒にもらった感覚でした

先輩　あなたは手が小さいから、工夫をしてみて。例えば、短いストロークでできる動きに変更するとか、細やかな施術を心掛けるとか

施術者　試験の前、散々練習に付き合ってもらった最後、ぽそっと先輩はそう言いました。この人は、なぜ私が心配に思っていることがわかるのだろう。そういう心の機微を読める人こそ、セラピストに向いているのだろう。自分もそうなりたいと思いました

施術者、両手で合格証書を受け取る仕草

施術者　無事試験に合格してお店に出るようになった後も、常連さんが付くかわからず不安を感じている時にも、先輩は声をかけてくれました

先輩　大丈夫、あなたの身体や施術に特徴があるように、やって来るお客さん一人ひとりにも特徴があって、きっとその中であなたの施術がぴったりくる人が必ずいるからね

施術者　その言葉通り、毎日せわしく働くうちに、少しずつではあるものの指名してくれる人が増えていきました。指名がない日も、そんなことを悲観している時間もない程とにかく忙しかった。お客さんとひとえに言っても、本当に、いろんな人がいるんです

施術者、これまで施術した人々のことを思い出し、手に再現する

施術者　施術が終わった後、「本当につらかったのに楽になった。ありがとう」とぼろぼろと泣きながらお礼を述べる人。いろいろな店舗に行って毎回異なる人を指名し、各自に成績表を付け、担当者に見せる人。同僚に聞くと、それがその人の趣味なのだとか。主婦に学生、働き盛りの人やご老人。たくさんの身体にふれる中で、一番驚いたのは、いわゆるサラリーマンなど、オフィスで働いている人々の身体の硬さです。出勤して、一日中パソコンを相手に仕事をしている人々の身体は、どうしてこんなに硬いのか。石のようにがちがちに縮こまった筋肉にふれる度、恐怖を感じるほどでした。人間の身体がこんなにも、凝り固まってしまう働き方とは一体何なのか

力を込めて、なんとかもみほぐそうとする動き

施術者　もみほぐしは強さではなく、ゆっくりと体重をかけ、同じ時間かけて離していく過程が重要です。しかし、そんなことはおかまいなしに、ひたすら強い施術を要求してくる人がいました。その身体は、一時はほぐれてもまたすぐに硬くなってしまう。そのことを、私の技量不足だと思っているようでした。言葉の節々に、私の仕事と、自分の仕事は違うんだという考えがにじみ出ていました。自分の仕事はとても忙しくて、とてもじゃないが休む暇なんてない。自分が止まると会社全体に損失を与えてしまう。ある時その人が、「そうだなあ、こういう働き方は、あなたには理解できないかもしれないけど」と言いました。その言葉を聞いて、そうか、それなら、わかるようにやってみようと思い立ったんです

施術者、施術台に座り、デスクワークの所作をする

施術者　一か月ほど、短期で事務職のアルバイトをしました。オフィスと言われるところに通って、いわゆるデスクワークをしてみてわかったのは、拍子抜けするくらい、この働き方はなんて楽なんだろうということでした。デッサンモデルの時の、鉛のように凝り固まった身体の重さ。一日に5人の施術を終えた後の、腕のしびれるような痛さ。それに比べると、デスクワークとは何て楽なんだろう。皆こんなに簡単な、楽な仕事をやっていたのか。それなのに、その態度はなぜあんなに偉そうだったのか

通勤と退勤の所作を繰り返す

家路を急ぐ身体の再現

施術者　そんなある日、身体が、徐々に凝り固まってきていることに気づきました

段々と身体の動きがぎこちなくなってくる

施術者　あれ、あれと思ううちに、肩は重く、足はむくんで、腰は硬まり動かしにくくなっていきました。そして、わかったんです。ああ、これは業務そのものの問題だけではないんだなって

通勤と退勤の所作、勤務中の動きを交互に繰り返す

施術者　オフィスの机と椅子は、はじめからそこに入る身体の形を決定しているし、電車やバスの座席の狭さも、通勤時間の人口密度の高さも、気付けば社会全体が、ひと一人のかたちをあらかじめ設計している。そこに入るために、身体はどんどん硬くなって、合わない箇所には次々不調が現れて、岩のような人間たちが、たくさん出来上がってしまったんだなと

徐々に施術の動きに移行する

施術者　ああ、必死なのかもな、みんな、と思いました。本当はわかっているんだと思います。だから他の職業を下に見たり、自分の仕事を尊いものだと思ったりして、何とか存在意義を作っている

背中にゆっくりと両手を置き、真剣な手つきで力を込めていく

施術者　それなら、せめて私だけは理解者になろう、と思いました。本人に置いてけぼりにされた身体に向き合って、本人は知らなくても、不調は自分が作り出していると認めたがらなくても、私だけはしっかりとほぐすことに務めようと思ったんです

施術台の上にある身体に向き合い、施術を続ける

腰から腕を伝って体重をかけていく動き

徐々にリズムを伴う

施術者　…強さ、大丈夫ですか

施術者　…痛いところはありませんか

施術者　…次、腰をほぐしていきますね

施術者　……

無言のまま施術は続いていく

施術者　…お客さんの中で一人、不調がずっと続いている人がいました。その人は、いつ来ても身体の至るところがちがちに固まっていて、毎回決まって全身をほぐ

すコースを選択します。ただ、施術中はこちらの言葉にほとんど応じません。うん、とかはい、など一言返ってくればよい方で、私の言葉のほとんどは、宙ぶらりんのまま消えていきました

施術者、足をもってほぐす仕草

施術者　一般的には、人は、ほぐすとその部分の血行が良くなり、皮膚に赤みがさしてきます。しかし、この方の場合は、何度さわっても一瞬赤みが差すだけで、他の部位をやっているうちにみるみる青白く戻ってしまう

徐々に自信を失っていく手つき

施術者　蒸しタオルを入れたり、足湯を差し込んだり、施術の仕方を変えるなど工夫はしましたが、それでも改善は見られませんでした。本人はいつも青白い顔をして、唇を固く結んでやって来る。私では無理なのかもしれないと思い、「ここはリラクゼーションサロンなので、本当にどうしようもなく身体がつらい時は、病院に行ってしっかりと治療を受けて下さい」と伝えたこともあります。しかし毎回なぜかここに来て、全身がつらいと訴えるのです

施術の手を止める

施術者　私は万策尽きて、久しぶりに、お世話になった先輩に連絡を取りました。先輩はその時既に違う店に移っていて、迷ったのですが頼ることにしたのです。状況を話し相談に乗ってほしいと伝えると、快く引き受けてくれ、確認したいことがあるので施術の用意をしておいてほしいと言われました。そこで、急に怖くなりました。先輩に施術し、いまの私の技術を披露する。一人のお客さんをほぐしきれない私の技量は、きっと指先ひとつですべてばれてしまうと思いました

施術台の後ろへ居直る

施術者　ところが、その日先輩が発したのは予想外の一言でした

先輩　施術台に、うつぶせで寝てみて

施術者　えっ、と言うと、「私があなたに施術するよ」と言われました。…え？

しずしずと、施術台の上にうつぶせになる

施術者　あの日のように、やさしい手がそっと背中に置かれました。まだセラピストを志して間もなかった、あの頃。こんな手つきで人にふれたいと思った、憧れの動きがそのまま身体の上にありました

先輩　結構硬いね、つらかったでしょう

施術者　言葉が、じんわり身体に染み込んでいく。何も言えずにそのまま施術を受けていると、先輩が頭の上で、呟くように言いました

先輩　コリっていうのはさ、こわばって硬く動かなくなった部分のこと。だから、本当はしっかりストレッチしたり、動かしたりすれば和らぐものなんだよ。でもわざわざここに来る人は、そうじゃない何かを求めているわけでしょう。じゃあそれは何か、ってことなんだよね

施術者　あの人が求めている、そうじゃない何か。硬い筋肉の感触と、引き締まった表情が浮かびました。あの人を身体の中からほぐすような、そんな何かがあるんだとしたらー…

先輩　あ、

施術者　…と、先輩が小さく声を上げました

先輩　いま、わかった？指が、すっと入っていったね。いい感じに、力が抜けたじゃない

施術者　言われてみると、ふーっと息が深くなって、より身体の奥まった部分に、先輩の指がもぐりこんでくる感覚がありました

先輩　何よりも、まずは本人が力を抜くことが大事なんだよ。そうじゃなければ、施術者がいくらほぐしたいと願ってもだめ。ほら、施術の最初に、必ず聞くでしょう。「今日のつらいところはどこですか」。そして決めるじゃない。「施術後には、こんな風に楽になっている状態を目指しましょう」って。それは、セラピストと、お客さん、二人で目指すものなんだよね。癒しっていうのはさ、一緒につくっていくんだよ。双方向なの

施術者、長い眠りから覚めたように、ゆっくりと起き上がる

【第五章】

施術者、ぴんと張った手拭いを広げ、折り、施術台の表面を丹念に拭きあげていく

歳月と経験が感じられる正確な手つき

細部を見詰め、端の端まで済ませると、心なしか施術台が艶を帯びている

新たな手拭いを取り出し、細く折ったのち顔を置く部分に円形に設置する

振り返り、客人を迎え入れる

施術者　お越しいただきありがとうございます。…今日はひとつ提案があって、いつものように全身を施術しつつ、基本的な流れは、私に任せていただいてもいいでしょうか

施術者、微笑む

施術者　…ありがとうございます。それでは、ゆっくりでいいので、こちらにうつぶせになってください

施術台の後ろにまわり、横たわる身体に話しかける

施術者　いつもとは少しちがう施術になるかと思います。違和感や痛みがある時は、いつでもおっしゃってください

両手を肩甲骨の上にそっと添える
ぐーっと、熱を分け与えていくように少しずつ力を加える
つぶやくようなささやかな声で、話し始める

施術者　…その昔、すべての生き物の背中には、ひとりひとつ、必ず翼が生えていたそうです

両手で背中にくるくると円形を描いていく

施術者　翼はその生き物を守ったり、大切な相手の元へ連れて行ったり、様々に生き物を喜ばせました。大きく広げると、雨風をしのぐこともできたし、他の生き物を入れてやることもできました。そんな翼は、徐々に、発達した足にとってかわられて使われなくなり、いつしかなくなってしまったそうです。人間の背中の左右に骨があるのは、翼がついていた名残なんです。いまではそのことを知る人はほんの少しだけになりましたが、悲しい気持ちの時、背中のがらんどうが意識されるのは、この時の翼が、あなたを抱きしめようとうずいているからなんですよ

そのまま徐々に腰の施術に移行する

施術者　もう一つ、人の腰がどうしてこんなに硬くなるのか知っていますか。それは、

やわらかいお腹の中に住む、もう一人のあなたを守るためなんです。人々のお腹には、もれなく小さな子どものあなたが眠っていて、日々生活をともにしています。大人になったら表面的には出さない喜怒哀楽を、お腹の子は正直に表現する。だから、色々な感情を持ちきれなくなると、腰が抑えようと必死に働いて、硬くなるんです。腰に痛みを感じた時は、どうか腹の中の小さな自分に耳を傾けて、感情を表に出してあげて下さい

施術者、背中から腰に大きな流れをつくるようにさする

施術者　あなたの身体には、これまで過ぎ去って来たさまざまな生き物たちが宿っていて、いつもあなたと共にいる。つらい時には見えない翼が身体を包み込むので、背中がつよく張ってしまう。悲しい時には遠くの景色を見せようとして、腰が反っては痛みをもたらす。でも、それはすべて、あなたが回復するための反応です。あなたの身体が、自分を守ろうとして硬く硬く閉ざしてしまうなら、私は、それを緩めるお手伝いをします。何度でもします。だからどうか一人で抱えないで、一緒に、ほぐれるように、やっていきませんか

施術者、しばらく施術を続ける
ふっと空気の変わったのを感じ、その人の顔の方を見て、微笑む
身体からふいに手が離れそうになるのを、はっと気づいてまた沿わせる
ふれた手が、とん、とん、と背中で小さくリズムを取り始める

施術者　…一時だけ私の中に居て、あっという間に消えてしまったあの子が見えた。…その人は、つぶやくように言いました。私は、私が、相手のことを気持ちよくしているんだとばかり思っていました。けれど、それは違う。これは一緒にやることで、一緒にやるからこそ回復するということを、その人は私に教えてくれました

【第六章】

施術台の上に、訪問者がうつぶせになって寝ている
施術者、その脇に立ち、背中に両手をあて円を描くように手を動かしている

施術者　今日は、本当にありがとうございました。なんだか余計なことまでぺらぺらと話してしまい、すみませんでした。…いえいえ、最後だということで、無礼講ということにしていただければありがたいです。そしてどうか、今日話したこ

とはきっと、忘れて下さいね。…それでは、最後の動きに移ります

施術者、両手のひらを大きく開き、背中の上から尻までをリズミカルにさすっていく

施術者　この動きは、施術の最後に、血流をよくし、よくないものを流す意味があるのですが、私はいつもこの時に、おまじないというか、気を送っているんです。これまで言葉にしたことはなかったんですけど、するとしたら、きっとこういうことかなって考えていました。…どうか、この身体が、この先、つらい思いや、厳しい状況に巻き込まれませんように。回復したいと願ったこの身体が、その強さを持ったまま乗り越えていきますように

施術者、手を止めて、その手のひらで背中のあたたかさを感じ取る

施術者　……

背中から手を離そうとして、ふと止める

その体勢のまま、話し続ける

施術者　…実は、私、今日が最後の出勤でした。あなたが正真正銘の、最後のお客さんです。…さっき、「どうしてお店じゃなくて、セラピストそのものを辞めてしまうのか」って、お聞きになりましたよね。ここまでお話しsして、わかりました。昔、何で聞いたのかは忘れてしまったんですが、小説家だったか、脚本家だったかが、自分の作品は、一人のために書いてるって言っていたんです。たった一人の決まった人がいて、その人を目掛けて書いているって。だから、その人にさえ届けば、それでいいんだと。…きっと私は、その一人に、届けることができたんだと思います

背中に手をふれられたまま、訪問者が身体を起こす

施術者、その身体の背後に立って、背中に手を添えたままでいる

施術者　最後の最後に、ひとつだけ。セラピストとして序盤に習うことの一つに、手の置き場があります。施術中、我々セラピストは、お客様の身体からなるべく手を離さないように訓練するんです。身体の反対側に回る時も、必ず背中に手を置いたまま回ります。さわる部位を変える時も、次の部位にふれてから、これまで施術していた部位に乗せていた手を離します。それはひとえに、安心のためです。お客さんが空間の中で、手の温かさを失って困らないように。身体の

所在をきちんと感じられるように。施術の最後、その置いた手を離すことを、
「てばなれ」と言います

背中にふれる手に力を加える

施術者　いつもは優しく、そっと離すんですが、今日はほんのちょっと、前に押し出すように、てばなれをしたいと思います。…それじゃあ、この度は本当に、ありがとうございました

施術者の身体と訪問者の身体が近くなる

施術者　…では、いきますね

添えた手の指たち一本一本がすっと立つ

施術者　それ、

訪問者の身体が、ふっと前に押し出される
その姿を見て、施術者は微笑む

送り出された身体は、追い風に押されるように進む
前に前に、どこまでも進んでいく

【完】

≪参考文献≫
・リフレクソロジーの事典　足から心と体のセルフヒーリング（塩瀬静江）
・手の倫理（伊藤亜紗）
・ことばと身体　「言語の手前」の人類学（菅原和孝）
・椅子と日本人のからだ（矢田部英正）
・手に映る脳、脳を宿す手（砂川融）
・心的外傷と回復（ジュディス・L・ハーマン）
・マッサージ台のセイウチ（アンソニー・グリエルモ）
・マッサージセラピー　軽い症状やストレスに効くリラックス自然療法（サラ・トーマス）